

特別寄稿

復活した「遺跡王国」ーエジプト観光最新事情 Revival of tourism in Egypt

野 崎 昭 男

「最近、日本でもエジプト熱が盛り返して来た」という旅行会社からの情報を得た。1997年11月の、あの世界中を震撼させた悲慘なテロ事件の影響はすっかり拭われ、エジプトは再び世界一級の観光地としての賑わいを取り戻しているという。たまたま岡山空港からエジプト航空のチャーター便が出ると聞き、マスコミ人の端くれ、また国際関係をテーマに講義している者として、この際一つエジプトの観光最新事情や現地の人々の反応などをこの目で確かめようと、JTB岡山支店の「世界遺産を訪ねる旅 幻想の国エジプトへ」という7泊8日のそのツアーに参加した。

岡山ーカイロ直行便

2000年2月16日、岡山空港には、尾翼にウルトラマリーナに赤と金でホルス神を描いたエジプト航空チャーター機が、関空経由で到着していた。260人乗り『エアバス340』。エジプト航空が岡山のようなローカル空港に乗り入れるのは初めて。空港ビルの展望室には、大勢の航空マニアがカメラのシャッターを切っていた。私たちのコースが103人。他のコースや別のツアーの団体も乗り合わせ、ほぼ満席の240人。岡山をはじめ鳥取、島根、香川など近県からの参加で、年齢層はやはり五十代から七十代と高い。

午後3時過ぎ離陸。日本海から朝鮮半島の南を掠めて中国へ。高度1万^{ft}、時速900^{km/h}。ゴビ砂漠、タクラマカン砂漠、カスピ海の上空を西進し、地中海東端を南下してナイルデルタへ。14時間のフライトでカイロ国際空港に到着。時差7時間。日本時間は17日午前5時

だが、現地時間は前日夜の10時。ビザは空港で取得。カイロも今が一番寒い季節だが、風は生暖かく、肌を感じる気温は日本の晩春。

ヨーロッパ製の大型観光バス3台に分乗。欧米と同じ右側通行でドアも右側だが、車体の中央部にもう一つドアがある。運転席横にしかない日本の観光バスや長距離バスは、後部座席の人が降りるのに手間取るが、これだと素早く乗降できる。日本で発生したバスジャックのような犯罪への対応にも有利なようだ。3台それぞれに日本から同行の添乗員と現地ガイドが付く。私たちのガイドは、ヤーセルという30代の若者。カイロ大学日本語科卒で、日本語は流暢。「太っているけどヤーセルです」と駄洒落もなかなかのものだ。

カイロ空港は市の北東約20^{km}。今夜の宿泊地ギザ地区は市の南西部。三大ピラミッドやスフィンクスがある大観光ゾーンだ。空港から37^{km}、バスは猛スピードでカイロの街中を駆け抜けた。「カイロには信号機がないと言われます。でも信号はちゃんとあります。守る車がないだけです」とヤーセル。

エジプトは面積約100万平方^{km}で、日本の2.6倍。大半は砂漠で、人が生活できるのはナイル川沿いのごく限られた地域。人口6060万人。その5分の1、1200万人がひしめく首都カイロは、アフリカ最大の都市で、アラブ世界全体の政治、経済、文化の中心地。エジプトは農業国。麦や綿花などが主で、第一次産業人口が38%を占める。鉱工業など第二次産業人口は20%、そして商業やサービス業など第三次産業人口は41%。第三次産業で大きなウエートを占めるのが観光部門だ。

その観光があつたテロ事件で大打撃を受けた。

ルクソールの悪夢

1997年11月17日。カイロから南へ約600^{km}のルクソールは古代エジプト新王国時代の首都テーベがあつたところで、エジプト屈指の観光地の一つ。ナイル川をはさんで、東岸にはカルナックやルクソールの壮麗な神殿が並び「百門の都」と呼ばれた。西岸には新王国歴代ファラオの墓や葬祭殿がネクロポリスを形づくる。高さ200^mの岩山の崖下に築かれた第18王朝のハトシェプスト女王葬祭殿は最も美しい建造物の一つ。岩壁を背に三段のテラスがあり、その中央を斜路が貫く。午前9時過ぎ、正面ゲートにブジョーで乗り付けた6人の男が、斜路を第二テラスまで駆け上がった。そこには日本やスイス、英国、米国、ドイツなどの観光客約90人がいた。いきなり自動小銃を乱射され次々に倒れる観光客。テラスの上は逃げ場がない。子供に覆いかぶさって守る母親にも容赦なく銃弾を打ち込んだ。男たちは止めてあつたバスで逃げ、駆け付けた警官隊と銃撃戦の末、全員撃ち殺された。事件に巻き込まれた日本人は添乗員の女性も含め11人。夫婦5組で4組までが新婚。男性1人が重傷で後は全員死亡。このほかスイス人43人、英国人4人など外国人観光客52人、エジプト人警官とガイドら3人が犠牲になった。

エジプト警察は、イスラム原理主義過激派「イスラム団」の犯行と断定。ムバラク大統領は「イスラム過激派壊滅に全力を挙げる」と再発防止に不退転の決意を表明した。だが、この事件はエジプトにとって深刻な経済的打撃となった。観光収入は、外国出稼ぎのエジプト人労働者からの送金、石油の輸出、スエズ運河通行料などと並ぶ主要な外貨獲得源。事件のあつた97年1年間に、外国人観光客が国内に落とした金は38億^{ドル}（約5380億円）に上る。しかし事件直後の12月は、外国人客が前月比51.7%も落ち込んだ。とくに日本人観光客は翌98年1月には、前年同月比で91%も減つた。その後、エジプト政府は汚名返上に全力を挙げ、治安を強化。テロ封じ込めのため観光警察の人員を倍増して要所々々に配置。警察官の質の向上を図るなど、

観光客の安全確保に万全の体制を敷いた。今、外国人観光客はほとんど事件前まで回復した。日本の外務省は今もって『注意喚起』対象地域にしているが…。

砂糖に群がる蟻のように

宿泊はギザの三大ピラミッドのすぐ北東にある「ルメリディアン ピラミッズ」という1992年創業のホテル。5階建て、部屋数523室。窓から大ピラミッドが望める。ホテルに着いたのが午前零時。入り口にはセキュリティチェック用のゲート。これは、これから行く全てのホテルに共通しており、テロ対策は徹底している。一風呂浴びてベッドに入ると長旅の疲れが、すぐ睡魔に襲われ、お陰で時差はたちどころに解消。翌朝、レストランでバイキング朝食。野菜やシーフードも豊富。欧米人の姿も多く、ほぼ満室の賑わい。

午前8時半にバスで出発。目指すはホテルの窓から見たあの三大ピラミッド。その中でも最大のクフ王のピラミッドの北面に近づく。駐車場は早くもバスがいっぱい。観光客がぞろぞろと列を作って、ピラミッドを目指す。まるで砂糖の山に群がる蟻だ。私たちがバスを降り、その蟻の仲間になってピラミッドにたかった。写真で見るとピラミッドは傾斜が緩やかに思えるが、実際の傾斜角は51度50分。切り立った崖を見上げるようだ。使われた石は約230万個。迫力に圧倒される。クフ王のピラミッドは遺跡保護のため入場人員を制限。残念ながら我々のツアーはチケットを手に入れることができなかった。「せめて入り口まで」と石積みの中の階段を登った。7、8^分登ると石組みを削って一人一人がやっと通れそうな穴があり、制服の男女の観光局職員と民族衣裳の年配の男が目を光らせている。

観光客は欧米人、日本人、アラブ系もかなりいる。遺跡の周囲いたるところに、武装した警察官が立つ。ピラミッドの底辺に沿って北東角へ歩いた。若い男が「写真を撮ってやろう」としつこく言い寄る。「ノーマナー」と言いながら私のカメラを持ち、素早く自分が首に巻いていたスカーフ様の布を、私の頭にターバン風に巻き、それからピラミッドをバックにシャッターを切ってくれた。礼を言つてカメラを返してもらつと

「テンポンド」と手を差し出す。「ノーマネーと言ったじゃないか」と言うと、自分のスカーフを指して「ターバン代だ」と言う。1エジプトポンドは約30円。大した額ではないが、押し売り行為は許せない。しつこく迫るのを、あくまで「ノーマネー」で突っぱね、バスの方へ引き返すと、恨めしげな顔で諦めた。

三大ピラミッドの中では最小のメンカフラー王のピラミッドまで約1.5km。日陰のない炎天下、とても歩ける距離ではない。バスには、拳銃を身に帯びた私服の観光警察官が一人、最前部の座席に乗り込んでいた。警護のためだ。バスの最前列は現地ガイドや添乗員だけ。観光客は座れない。万一の事故で、そこに観光客が座っていたら、保険が下りないという。

このピラミッドの入り口も北面の中央、少し登った所。狭い板敷きの急な通路を下へ下へと降りる。やがて水平な通路になり、そこから玄室へ。天井はアーチ型。壁画に装飾はない。空っぽの部屋がL字型に三室に分かれている。頭上に何方[↑]のもの石の山があるのかと思うと、変な気分になる。

大スフィンクスを見た後、ラクダの糞で汚れた道を歩き、近くのバピルス製造販売店に行く。A5判くらいで30エジプトポンド。日本円で900円くらいだから結構高い。でも極彩色の壁画風の絵が手書きで描いてあるのだから当然かもしれない。スフィンクスの周辺で物売りが手にしているバピルスなるものは、10枚で10ポンド。びっくりするほど安い。バナナや砂糖キビの茎を張り合わせた偽物で、日本に持ち帰ったころにはバラバラだ。昼食はシーフードレストラン。エジプトはイスラム教国。アルコール類はご法度だが、そこは『インシャラー（神様のお心のままに）』のお国柄。外国人観光客用にちゃんとビールやワインが用意され、注文すればいくらでも。ただし値段は日本の中瓶の大きさで11~14ポンド。ホテルやレストランによってまちまちだが、日本円で330円から420円。教員の月給が15000円くらいだから、やはり外国人用。

博物館、そして音と光のショー

午後からはカイロ市の中心部にあるエジプト考古学

博物館へ。ここもテロ事件があった。ルクソール事件の2カ月前の9月。博物館前でテロリストが観光バス2台を襲撃、ドイツ人ら10人が殺害された。それだけに警備は厳重。博物館の外門にはボデーチェック用のゲートと手荷物検査用のX線検査装置があり、1人1人が通過しなければならない。館内には190台の監視カメラも配置されている。私たちが訪れたのは午後2時ごろで一番込み合う時間帯。バスの駐車場もごった返していたが、この入場ゲートも大勢の観光客が殺到して、かなり手間取る。しかしそこを抜けると広々とした前庭があり、二階建ての巨大な博物館の内部は、高い天井、ゆったりした遺物配置で、あれほどの観光客がどこへ消えたのかと思うほど静かだ。二階には有名なツタンカーメン王の墓から発見された秘宝の数々が、幾部屋にもわたって並ぶ。黄金のマスク、黄金の玉座、棺を覆った三重の厨子、首飾りなどの装身具が古代そのままに光り輝き、入館者を魅了する。ノートを取ったり教官の説明に耳を傾けるエジプトの学生グループがあちこちに見られる。

ホテルに戻って一息つく間もなく『ピラミッド音と光のショー』が待っていた。昼間通ったスフィンクスと河岸神殿の真ん前。午後6時前。紫色に暮れる西空を背に、三大ピラミッドが巨大なシルエットを見せる。300人くらい座れそうな椅子席を埋めた観客のほとんどが日本人。私たちは運よくその日の日本語バージョンの時間に行き合わせた。とっぷり日が暮れ、漆黒の闇が辺りを包む。と、突然耳をつんざくような音楽が鳴り響き、目の前のスフィンクスや彼方のピラミッドが、赤や青の光でライトアップされて浮かび上がる。客席からどよめくような歓声。重々しい口調のナレーションと、腹にずしんと響くようなオーケストラの演奏で、ピラミッドを中心にした古代エジプト史が語られ、夜の砂漠に壮大なパノラマを繰り広げる。このショーは1日2、3回行われ、日、英、独など6カ国語のナレーションが、ローテーションに組み込まれている。鹿児島県の屋久島とほぼ同緯度のカイロだが、やはり冬。砂漠を渡る夜風は冷たく、春物のセーターが役立つ。約1時間のショーが終わり、私たちが席を立つと、

はや次の観客が大勢、柵の外で待っていた。

絨毯工場の少女労働者たち

翌18日はサッカーラの古王国第3王朝のジェセル王が作った階段状のピラミッド、そこからさらに南のダハシュールにある第4王朝初代のスネフェル王が築いた屈折ピラミッドと表面の石灰岩が風化して赤っぽく見える赤いピラミッドを訪れた。赤いピラミッドの内部に入るようになったが、腰をかがめてやっと通れる狭い穴を10ほど下ったところで胸がぐとつかえる感じがしてUターン。閉所恐怖症だ。

ダハシュール、メンフィスを回ってカイロへの帰途、絨毯工場を見学した。絨毯もこの国の重要な産業。それも小さな子供たちが主役だ。絨毯を織る作業は、十二、三歳までの少女の小さな細い指でなければ、細かい部分ができない。そのため小学校に上がるか上がらないかのころから、絨毯工場で働き、熟練工として家計を潤している。私たちが立ち寄った絨毯工場でも、民族衣装に身を包んだ十歳前後のまだあどけない少女たちが、大きな絨毯一枚に五人掛かりで作業していた。風景や花、ラクダなどの動物をあしらった絵柄が『設計図』に従って、目にも止まらぬ鮮やかな手さばきで、織られていく。一枚織り上げるのに一月以上は掛かる。少女たちは私たちを見ると、座っている長椅子をちょっと空けて「ここに座れ」とか「写真を撮れ」という仕種をする。もちろんチップ目当て。完成品は小さなものでも日本円で数万円。高価だが、特産のエジプト綿を使用し、光沢や丈夫さが売り物。

スーク見物とベリーダンス

カイロ市東部、イスラム地区にあるハーン・ハリリーはエジプト最大のスーク（バザール＝市場）。大型観光バスは車や人で雑踏する通りへ乗り入れた。けたたましい警笛、人々のわめき声。お構いなしにぐんぐん進む。よく事故が起きないものだと冷や冷やししながら広場に着く。次から次へ観光バスがやって来る。

昼食のビールが祟って、猛烈に尿意を催した。ヤーセルにトイレの場所を聞くと「あまりお勧めではない

が」と前置きして、場所を教えてくれた。迷路のようなスークのど真ん中、両側に小さな店が軒を並べる洞穴のような薄暗い通りの片隅に半地下のトイレ入り口が見えた。男性用便器はずいぶん高く、身長167cmの私は爪先立ちしなければ用が足せない。エジプトもチップの国。ホテルのポーターやメイドには3ポンド、枕チップは3～5ポンド、そして観光地の公衆便所はもちろん、空港や博物館、レストランのトイレでも25～50ピアストル（1ピアストルは1ポンドの100分の1）。トイレで用を足し手を洗っていると、手拭き用の巻紙をちぎって差し出す。そのつど小銭が必要。きれいなトイレを使わせてもらっているお礼だろうが、日本人には煩わしい。「さてチップ」とポケットに手をつ込んだ。先客の米国人男性はチップを取られている。ところが私には要求する素振りを見せない。そのまま失礼。なぜ見逃してくれたのか分からない。

ここはカオスの街。狭い通り、大通りが網の目のように交差し、両側に日曜雑貨や衣類、食料品、果物や野菜を売る店が道にまで品物を並べている。パピルスや香油、スパイス、香料、革製品、金銀細工などの民芸品や工芸品を売る店もある。私たちがデパートやスーパーへ買い物に出かけるように、エジプト人はここで日用品を用立てる。通りはごった返し、人込みの中に車やバイクが乗り入れ、荷物を積んだ馬車が駆け抜ける。日本人と見ると店から声が掛かる。「バザールデゴザール」「ヤマモトヤマ」「チョットマッタ」「サラバジャ」…いったいだれが教えたのだろう。

夕食はナイル川ディナークルーズ。103人のグループ全員が入れる広い船室でバイキング料理。船はナイル川をゆったりとさかのぼる。両岸にはビルが建ち並び、窓の灯やネオンが水面に映える。美しい夜景に見とれ、ビールもうまい。ベリーダンスが始まる。リュートやツィターなどの弦楽器と、ドラムやタンバリンなどの打楽器に合わせ、胸と下半身だけを薄物で包んだ美女が、悩ましげに体をくねらせて踊る。エジプト古来の踊りにトルコのハーレムの匂いを添え、アラビアンムードたっぷり。ベリーダンサーは高給取りだ。イスラム教国では女性は決して肌を露出しないが、ベ

リーダンサーは別。一晚のショーで40~50万円になる超売れっ子もあり、この国の一般庶民の収入からは掛け離れている。この夜のダンサーは『木村カズミさん』という日本人。カイロにはもう一人『ミドリさん』という日本人ダンサーもいるそうだ。船室中央の舞台上でひとしきり踊ると、客席を回り客の手を取って一緒に踊らせる。私もビールの勢いで席を立ち、合わせて腰を振る。爆笑。専属カメラマンがシャッターを切る。船が船着き場に戻るところには写真が出来上がっていた。八つ切りサイズで23エジプトポンド（690円）。

モハメッド・アリ・モスク

ラムセスヒルトンホテルはカイロの中心部、ナイル川中洲のゲジラ島から10月6日橋を東に渡った取っ付きの36階建て。私の部屋は11階。朝、南向きの窓からのぞくと、眼下に考古学博物館やカイロ・アメリカン大のキャンパスが横たわる。右手にはナイル川の流れ、ゲジラ島にはカイロタワーがそびえ、やがて林立するそれらの高層ビル群が、朝日を浴びて輝き始めた。

バスでモハメッド・アリ・モスクへ。このモスクは、カイロの市街地の南東部、昨日訪れたハーン・ハリールから南へ約3キロにあり、自ら王朝を立てエジプトを独立させたモハメッド・アリが1830年に建てた。美しいステンドグラス。シャンデリアやランプが眩しい。ここはイスラム教の神聖な礼拝所であり、絨毯敷きの床は土足厳禁。あちこちで観光客のグループが車座になって、ガイドの説明を聞いている。来た時は人影はまばらだったが、いつの間にか足の踏み場もないほど。テラスからカイロ市南部が一望できる。地味な焦げ茶色一色の街。住宅は全て日干し煉瓦造り。息子や娘が結婚して家族が増えると建て増しをしていく。そのためいつも建築中。窓ガラスのない家も多い。

モスク見物を終えカイロ空港へ。私たちのバスのすぐ前を黒塗りのベンツが連なって走っている。「ムバラク大統領と会談のためやって来たPLOのアラファト議長の一団だ」とヤーセルが教えてくれた。昼食に立ち寄ったカイロ・シェラトンホテルのロビーにも、警備の私服警官があちこちにたむろして、携帯電話で

連絡を取り合っていた。観光気分から、中東が直面する現実の世界に引き戻される。午後1時にカイロ空港を出発する予定も、その影響で大幅に遅れ、4時前にやっと離陸。アスワン到着は午後6時。ナイル川の中洲・イシス島に建つ5階建てのリゾートホテル、イシスアイランド・アスワンまでフェリーで20分。

アスワンハイダムの功罪

翌20日早朝、ホテルの庭を散策した。アスワンは北緯24度。北回帰線に近い亜熱帯だが、朝の気温は10度台で涼しい。旧暦1月の白い満月が、ナイル西岸の岩山に沈もうとしていた。岩山とナイル川の間には緑の農地が広がり、水鳥が遊んでいる。

上流のアスワンハイダムは、堰堤の基底部の厚さが約1^{km}、長さ3.6^{km}、高さ110^m。1964年に完成した。ダムによって生まれた湖は、当時のエジプト大統領の名を取って『ナセル湖』と呼ばれる。全長500^{km}、幅は平均10^{km}、日本の琵琶湖の約7倍の巨大な人造湖により、電力供給は安定、ナイル川の氾濫もなくなるなど、エジプトに数々の恩恵をもたらした。しかし負の部分も多い。建設に伴い多くの人々が住む所を追われ、貴重な古代遺跡も水没した。ナイルの氾濫は肥沃な土を上流から運んでくれたが、ダムのせいで農地が痩せるという逆効果も。また、もしダムがテロなどの標的となって破壊されたら、ナイルデルタまでの下流の町が全て水に飲み込まれる危険性があり、軍事上の大きなアキレス腱となった。堰堤の上。北にはナイルの流れ、南には果てしなく広がるナセル湖。空は少し霽っている。湖から上る水蒸気のせいだ。昔は澄んだ青い空だったとか。国内最重要施設だけに観光客が立ち入れる所は堰堤上のごく一部。警備はエジプト軍だ。

アブ・シンベルの巨像

アスワンからさらに南へ280^{km}、スーダンとの国境に近いアブ・シンベル。アブ・シンベル神殿は新王国第19王朝のラムセス2世によって築かれた。1960年代までは、現在地から110^m東のナセル湖の中に位置し、ダム建設で湖底に沈む運命にあったが、ユネスコによ

り神殿全体を移動する大プロジェクトが実施された。岩山の中にくり抜かれた神殿を1036のブロックに切って65^尺以上に移動。10年がかりで1972年に完成した。

アスワン空港は入り口と搭乗ロビー口の2回もセキュリティ・チェック。ローカル空港だが、アブ・シンベルやルクソールへ向かう観光客でごった返している。アブ・シンベルまでわずか40分。アブ・シンベル空港からは無料送迎バスでナセル湖の畔へ。写真でおなじみの高さ20^尺の巨大な4体のラムセス2世座像が迎えてくれる。岩山を穿った大神殿の中。一番奥の至聖所にラムセス2世と3体の神像が並ぶ。神殿は真東を向き、2月22日と10月22日の年2回、日の出の光が一直線にこの至聖所に届き、4体の像を照らし出す。今日は20日。明後日だ。超一級の観光地で欧米人グループも多い。神殿入り口は順番待ち。神殿内でのカメラ撮影は、ピラミッドなどと違って無料（ピラミッド内部は10ポンド）だがフラッシュはだめ。「ピカッと光ったら警備員が飛んで来てフィルム没収」だ。

ふたたびアブ・シンベルからアスワンへ。エジプトの航空運賃は他の物価に比べれば随分高い。アスワンアブ・シンベル間が片道74^{ドル}。日本円で7700円程度。一般のエジプト人に利用できる値段ではない。

アスワンのニュー・カタラクト・ホテルで昼食。すぐ隣にアガサ・クリスティーの『ナイル殺人事件』で有名なオールド・カタラクトの重厚な建物が望める。最近まで日本人はなかなか宿泊できなかったそうだが、今回、同じ飛行機で来たファーストクラス・ビジネスクラスの連中が泊まっている。食後はファルーカでナイル川クルーズ。ファルーカはヨットに似た1枚帆の小型帆船。かつては物資や人を運ぶ重要な交通手段だったが、今は専ら観光用。操るのは2人1組のヌビア人。エジプト南部に住むヌビア人は、隣のスーダンやエチオピアと人種的に近い。色黒で彫りの深い顔立ち。温厚で人懐っこく、しかも誇り高い。ファルーカは見た目は小さいが、31人のグループ全員が1艘で間に合う。帆を孕ませ静かにナイル川を遡る。舵を取る年配のヌビア人が、タンバリンのような楽器を鳴らし、ヌビアの歌を聞かせてくれる。哀調を帯びたメロディ

ーが川面を流れる。遠くで別の歌声。子供が一人、小さな箱舟に乗り、こちらをめがけて両手で漕いで来る。添乗員が「絶対にお金を与えないで下さい」と注意する。ファルーカのすぐ側で歌い続ける。可哀想な気もする。やがて諦め別のファルーカの方へ漕いで行った。そんな子供達の小舟があちこちに。一つのファルーカで金を与えると、全員が寄って来るそうだ。

百門の都と王家の谷

午前10時アスワン発の便でルクソール空港へ。カルナック神殿はルクソールの市街地北部にある。参道の両側には、聖獣・羊の頭をしたスフィンクスが約40頭並んで観光客を出迎える。神殿の周囲には警護の兵士。「写真を撮ってやろう」とチップ目当てに近寄ってくる。昼食はエジプト名物鳩料理。ルクソールの宿はソネスタ・セントジョージ。6階建て224室。創業は1997年10月、テロ事件の1カ月前。事件直後は大打撃を受け、部屋の稼働率が2~3%にまで落ち込んだ。が、今はすっかり回復した。この日も各国の観光客で満室。客室からはナイル西岸の王家の谷のある岩山が望める。日が暮れ、岩山のハトシェプスト女王葬祭殿がライトアップされた。観光用ではなく警備のためだった。眼下のナイル川を真っ白な帆に風を孕ませたファルーカや大型クルーズ船がひっきりなしに行き交う。

カルナック神殿の音と光のショーへ。神殿入り口前の広場には、日本人や欧米人ら観光客が続々集まって来る。およそ500人。ゲートが開き、羊のスフィンクスの参道を通って、狭い塔門から次々に観光客が入ると、内部が順番にライトアップされ、神殿の東にある『聖なる池』に導く。池は広さ約100^尺四方。神官が禊（みそぎ）をした所。その東に観客席が作られ、全員がそのベンチに腰を下ろす。やがて神殿内の数々の塔門やオベリスク、列柱がライトに浮かび上がり、荘重な音楽をバックに、古代エジプトの神々と王のドラマを物語る。この日のナレーションは英語。帰りぎわ、廢墟の上に昇ったレモン色の十七夜の月が印象的。参道は二回目のショーを待つ観客で埋まっていた。

翌22日は午前6時にバスで出発。市街地の南に架か

るルクソール橋を渡りナイル西岸に。この橋は1997年、あの事件の少し前に完成した。それまではフェリーが唯一の交通手段。橋が出来たことも、テロを容易にした一因だろうか。橋を渡り王家の谷の入り口へ。途中、早稲田大学調査隊のキャンプハウスもあった。

駐車場でバスを降り、土産物や食堂を兼ねたゲートハウスへ。谷まではここから4〜500^{ドル}。遺跡保護のため、ここでは遊園地の汽車に似た電動カーが主役。日差しを避けるための幌と座席の付いた車を2両繋いでおり、一度に40人は運べる。他にロパで行く手もあるが、これは団体向きではない。5、6台の電動カーがゲートと王家の谷をピストン輸送。

日中の強い日差しを避け、朝の涼しいうちにと、谷は見る間に観光客で埋まる。ツタンカーメンの墓に入った。他の墓はどれでも3カ所で20ポンドだが、ここだけは40ポンドで別格。奥行き40^{ドル}。あっけないほど小規模。エジプト考古学博物館を飾るあれだけの副葬品が、よくこの中に詰まっていたものだ。埋葬室の石棺の中には、今も少年王のミイラが眠る。奥行き110^{ドル}のセトナクト・タウセルト女王の墓やメルエンプタハの墓にも入った。これらの王墓、現在公開されているものが、ある日突然非公開になり、非公開だったものが公開されるなど、目まぐるしく変わる。大勢の観光客が毎日押し掛けるのだから、遺跡の維持保存も並大抵ではない。観光エジプトのジレンマ。いつか全面非公開になる日が来るのではと心配される。

ゲートの外にテント掛けの土産物店が軒を並べる。男が私に黒御影石製の高さ10^{ドル}から20^{ドル}のファラオや王妃の胸像と猫の像の3点セットを勧める。「200^{ドル}」「とんでもない」と断ると値を下げて来る。こちらも10^{ドル}から始め「15^{ドル}」「20^{ドル}」で「これ以上出せない」と帰りかけると「それでいい」。ヤーセルに見せると、爪を立てて「大丈夫」。時には軟らかい砂岩に色を塗った粗悪品を掴まされることもあるという。

ハトシェプスト女王の葬祭殿は、王家の谷の外の岩壁の下。ゲートは葬祭殿の遙か手前にあり、観光警察官の姿がそこに見える。事件のあった第二テラスのどこにも、もう惨劇の痕跡はない。最上部の第3テ

ラスは修理中で、観光客は上がれない。周囲の岩山の上に点々と、銃を持った警官が立っている。最近また、警察官の見張り小屋が増設された。

午前10時半にホテルに帰着。これで今回のエジプト観光の全行程が終わった。ルクソール空港から岡山空港へ直行便。午後3時前にテイクオフ。23日午前10時には岡山空港に到着。所要12時間、帰りは速い。

観光産業と遺跡保護の今後

エジプトの観光産業は確かに復活していた。徹底的なテロ封じ込め戦術、そして観光警察の増強と、警察官の質の向上。軍隊までも動員した観光地の嚴重警備。それによって、ドル箱である外国人観光客の安全は保たれている。エジプトの世界遺産は、アブメナのキリスト教遺跡、古代テーベとネクロポリス、イスラム文化都市カイロ、ギザからダハシュールまでのピラミッド地帯、アブシンベルなどヌビア遺跡群一の5カ所。いずれも『文化遺産』としては、桁違いのスケールと古さを誇る『世界の宝』だ。

だが、エジプト社会の現状はどうだろう。確かに行く先々に、我々日本人も含め、外国人観光客は溢れ、多額の外貨がエジプトを潤している。しかし、エジプトの一般庶民の月収の何倍もするような宿泊費や高価な飛行機代を払って旅をする外国人。金製品など、エジプト人の年収を上回るような高額な土産物をこどもなげに買う観光客。塗装の剥げたガタガタのおんぼろ車や、ドアも窓ガラスもないような乗り合いバスが、大勢の労働者を乗せて行き交う通りを、警笛を鳴らして蹴散らすように駆け抜けるデラックス観光バス。エジプトの人々は、そんな外国人観光客を、心の底ではどう思っているのだろうか。

政府高官の汚職や市場経済制度への移行で、所得格差は広がり、不公平感は募る。テロ事件の背後には、そのような社会的不満や貧困にあえぐ人々の怨念がある。エジプトの社会構造が改善されない限り、いくら力で抑えつけても、政府要人を狙ったテロや、巨額の外貨をばらまいて現政権に与するような外国人観光客を対象にした無差別テロは、これからも起こり得る可

能性を残しているのではないか。日本人観光客の多さを見るにつけ、国内の不景気風をよそに、観光熱だけは衰えを知らない、そしてそれだけで『国際人』になれたと錯覚しがちな我々日本人にも、責任の一端はあるようだ。

また、エジプト観光は即『遺跡観光』であり、観光振興と遺跡保護の二律背反をどう解決するのか。エジプトは今、旅人を魅了する雲一つない青空とは裏腹に、極めて難しい問題に直面しているようだった。

注

データは「共同通信社世界年鑑1999」を参照。

(2000年12月1日 受理)